

白いピアノ

前泊 選香

「皆様への御礼の気持ちと、このマークが少しでも長く皆様の心の中に残り続ける事を祈っております。」

この言葉を胸に、感謝の気持ちを込めて私なりの言葉を綴る。

2014年若夏、この島の大きな百貨店が閉店することを知った。長く愛された「デパート」だった。

内地での暮らしを終え沖縄に帰ってきたのはほんの数年前。那覇市中心街の雰囲気は変わっていた。メインストリートの国際通りはお土産品店が立ち並ぶが、ふと見上げればビルの2階以上は「貸店舗」だらけ。期間限定の買物客で賑わうこの場所は「寂れ」も感じさせる。その中心に位置するこの百貨店もまた然り、大型ショッピングセンターや改革を進める競合百貨店に買物客は流れ、「寂れ」を感じざるを得なかった。今まで何とか持ち堪えていたものの、ついに閉店となったのだ。

私にとってこの百貨店は幼い頃の華やかな時代の思い出がたくさん詰まっている。

時代は「バブル時代」真っ只中、おしゃれな洋服を着て週末はよくここに連れてきてもらった。

賑やかな街中のキラキラした大きなお店。きれいなお洋服にお化粧品、お子様ランチ。ここへ来ると特別な気分になり、ワクワクしたことを今でも憶えている。

特に私を夢中にさせたのは輝く店内に置いてある白いピアノだった。白い鍵盤と黒い鍵盤がひとりで踊りだし、ぼろんぼろんとワルツを奏でる。そんな不思議なピアノを眺めている時間が好きだった。迷子になった時も踊る鍵盤を眺めながらメロディを聴いていると心細さはなくなった。真っ白でピカピカのピアノは、「キラキラした大きなお店」の象徴だった。

それから数年が経ち、不思議なピアノはプログラムされた機能だとわかり始めた頃、「バブルが弾けた」時代。父が経営する会社も世に洩れず影響を受け、贅沢はできなくなった。そして父と母は別々に暮らすことになり、家族である百貨店に行くことはなくなった。

閉店が発表されてから何度かこの百貨店を訪れた。その度にあの白いピアノを眺めた。あの時と同じようにメロディを刻む鍵盤は幼い頃の私の記憶を蘇らせる。ただ、踊る様に動いていた鍵盤が心なしか寂しげだった。

まるで最終章を奏でる時期をわかっているようだった。

陽が落ちるのが早くなり始めた頃、閉店の日が近づいていた。9月21日。母の誕生日だ。妹と相談した結果、誕生日プレゼントはこの百貨店で買うことに決めた。

閉店前日。最終売り尽くしセールが開催されている店内。商品を吟味する買物客、掠れた声でお買得商品を紹介する男性従業員。かりゆしウェアに汗が滲んでいる。

如何にも明日閉店といった感じで隙間が目立つ商品棚。残された品物がぼつんぼつんと並んでいるがその佇まいは美しい。自分の価値を知っている姿だ。その凛とする姿をいくつか眺めた後、グレーの光沢があった財布を手に取った。派手すぎず、中央についているスワロフスキーが少しだけ華やかさを出し、贈物に相応しいと思った。母への贈物だと告げると、買物客の対応に追われているにも関わらず、白地に赤の包装紙で丁寧に包ん

でくれた。この場所での最後の買い物だ。

明日閉店。熱気を帯びてきた買物客で賑わう店内。時代に取り残された百貨店の最後は決して寂れたものではなかった。汗だくになりながら声を張り上げていた男性従業員、一人一人丁寧に接客をする中年の女性従業員。その姿から誇りを感じる。この百貨店を愛する地元客、洗練された従業員、華やかな時代のあの百貨店が蘇った気がした。

時代のニーズに応えた最新の商品はないのかもしれない、大型ショッピングセンターのように手軽に買物ができる場所ではないかもしれない。それでもそのどちらにもないものをこの百貨店は持っていた。それは半世紀以上の年月が刻んだものであり、地域の買物客と築き上げてきたものだ。

「閉店」よりも「引退」といったほうが相応しいだろうか。またひとつ歴史にピリオドが打たれる。

贈物が入った紙袋を誇らし気に持ち外へ向かう。陽が落ちた国際通りから

ミーニシが吹いてきた。この島にも秋の香りが訪れる。季節は流れる。時代は変わる。そういうものだ。そう、時代が変わったのだ。最後にあの白いピアノを眺める。もう鍵盤は踊っていない。

(了)